

(つくば大学芸術学研究科卒)

株式会社アートインプレッション 代表取締役)

1982年3月 卒業

**展覧会プロデュースの仕事を通じて  
- 信頼の関係と国際的な文化交流**

市川 飛砂 (高34)

立高生のみなさん、こんにちは。入学されて以来、どのような高校生活を送られているのでしょうか。

私は美術館や博物館などで開催される展覧会をプロデュースする仕事をしています。普段はできあがった展覧会をご覧になるだけでしょし、またこのような仕事についておそらくあまり馴染みがないかと思しますので、この機会に、展覧会プロデュースの仕事内容と、私がこの職業に就くに至った経緯をお話したいと思います。

立高時代はバスケットボール部に所属。部活動には一生懸命励みました。それと同時に、立高の伝統である合唱祭、体育祭なども本当に楽しく熱心に参加していました。学友とともに過ごした立高時代は私にとってかけがえのない思い出です。

私が美術の世界に入るきっかけとなったのは、大学生の頃でしょうか。東京外国語大学のフランス語学科に入学し、最初はフランスの文化やファッションに対して漠然とした憧れを抱いていましたが、次第にフランスの美術を通じて、美術に関係した仕事に就きたいと思うようになりました。父が絵を描いていたこともあり、小さい頃から父が出品する展覧会や、上野の美術館に連れていってもらったことも、今にして思えば影響していたのかもしれない。

外語大を卒業してから筑波大学芸術学研究科に進学、そこで生涯の恩師と出会い、西洋美術史を学びました。もともと美術を通じて世界とつながるような仕事に就きたいと考えていたため、大学院修士課程修了後は、フランス人が社長を務める展覧会プロデュースの会社に就職しました。

外語大卒でフランス美術専攻でしたので、おそらく即戦力として期待されていたかと思いますが、展覧会プロデュース業務は私の想像をはるかに越えて多岐に渡るものであり、毎日が勉強といった日々でした。その間、フランスを中心とする、エッフェル塔 100 周年を記念した展覧会やシャガール展を初めとして、欧米諸国との仕事で経験を積み、2000 年に現在の株式会社アートインプレッションを設立いたしました。

会社設立に至るまでに多くの仕事先の方々や関係者による支援があったことは言うまでもありません。また展覧会プロデュースを通じて、国内外に少しずつではありますがネットワークを構築できたことも大きな成果でした。会社設立後間もなく、長く一緒に仕事をしてきたアメリカのとある美術館長からロシアの美術館と国立図書館を紹介され、その時から私とロシアとの仕事が始まりました。

私にとってロシアは全く未知の世界で、最初は本当にできるのだろうかという心配もありましたが、やはりロシアの持つ芸術・文化の水準の高さ、奥深さは素晴らしく、また同時にパートナーであるロシアの美術館の方々の誇り高くも温かい対応によって、ロシアを代表するエルミタージュ美術館、トレチャコフ美術館、そしてロシアバレエの舞台デザインをテーマにした展覧会など、継続してロシアの展覧会を開催することができました。とりわけサンクトペテルブルグのロシア国立図書館写真部長は、私がロシアの母と仰ぐほど親身になって助言や指導をいただき今でも交流が続い

ています。

展覧会プロデューサーは、作品を貸してくださる海外の美術館や所蔵者と、展覧会を開催する日本国内の美術館や関係者との間にたって仕事をします。両者の希望や思惑は必ずしも一致せず、そのような場合は、双方の意向を聞きながら、相互理解をはかっていくことが、プロデュース側の仕事です。

国内にはおよそ 1000 館の美術・博物館があります。それぞれの館の活動方針、収集コレクションの内容、所属する学芸員の専門分野などを考慮して、展覧会に相応しい会場を選別し、運営していくのも大事な仕事のひとつです。

ところで、海外から作品を借りてくるためには、必ず輸送業務が伴います。貴重な美術品を輸送しますので、その為の専門の技術とノウハウと人材を備えた美術輸送会社に依頼をすることになります。またもう一つ、必ず発生する業務として保険手配があります。世界に一つしかない美術品をお借りするわけですから、その借用に際しては必ず保険にかかります。こうした輸送や保険といった業務の他に、展覧会公式カタログの編集・発行、関連グッズの商品開発と販売、展覧会の広報、関係する各国大使館との連携など、展覧会プロデュースの仕事は実に多岐に渡るものです。



ロシア国立エルミタージュ美術館副館長執務室にて

ここまで、展覧会の成り立ちを、かいつまんで話して参りましたが、常に言えることは、どのような業務においても、借用先の美術館、相手国との信頼の関係がなければ仕事は進行しないということです。2011年、東北大震災の年に私はフランスとロシアからの展覧会を企画していました。ロシアからの展覧会は開幕が5月下旬でしたが、それに先立つ3月11日に震災が起これ、直後にロシアの美術館からは心のこもったお悔やみとともに、非常に残念ではあるが展覧会を延期せざるを得ない旨の手紙が届きました。人命救助が最優先であり、また国内情勢も混乱する中、美術界でもほとんどの海外展覧会が中止になったり、延期になったりしておりましたので、正直なところ、私も展覧会を諦めざるを得ないかもしれないとかすかに感じていました。一方で、展覧会の開催地である北海道、東京、中国地方の美術館では震災の影響もそれほど大きくはなく、とりわけ第1会場の札幌の美術館は、開幕を直前に控えてかなり準備も進んでいるという状況の中で、展覧会は必ず開催するという強い方針をもって臨まれ、ぜひ実現してもらいたいとの強い要請がありました。

非常に難しい局面でした。作品を貸す側のロシアの美術館からすれば、大変に心配されていることは十分に理解できましたが、一方で日本側の強い意向もあり、私もなんとか展覧会を実現したいと考えるようになりました。駐日ロシア大使館を通じて、日本側主催者の意向を伝えるとともに展覧会実現に向けての協力をお願いし、その主旨はロシア政府から美術館にも伝えられるところとなりました。こうしていくつもの難関を越えて展覧会は実現に至ったわけですが、最終的には日本に対する復興支援の一環として、作品貸出がなされたとも聞いています。この展覧会は多くの方々の

熱意と協力を経て実った展覧会として強く私の記憶に残っています。

海外から作品を借りる場合、政府間のサポートは大事です。また何よりも、貸出の美術館やそこで働くスタッフ、パートナーとの信頼関係があってこそ、成立するものだと思います。展覧会は単なる他国の文化紹介ではなく、国と国との文化交流、また更には文化外交の意味合いもあるということ強く感じています。

この仕事をしていて、いちばんやりがいを感じるのは、どうい  
うときかと良く聞かれます。もちろん、展覧会が開幕を迎えた時  
にはそれなりに感慨深いものがありますが、それよりも、一つの  
展覧会が成功裡に終わって、国内外の美術館や関係者の方々から、  
「市川さん、次はどのような展覧会をしましょうか？」と問われ  
たときです。それは、信頼の関係がまたもう少し強固なものにな  
ったと実感できるからなのです。このとき、人間と人間の関係が  
もう一歩発展したと感じますし、私はそこに言いようも無い感動  
を覚えるのです。会社を設立して今年で15年になりますが、この  
間、約30本の展覧会を手がけてきました。今年はフランスの風景  
画をテーマにした展覧会や、ハンガリーの由緒ある伝統的な陶芸  
へレンドの展覧会を開催します。



パリの街角にて

21世紀を生きるみなさんには、ぜひ国際的な視野を持っていただきたいと思います。世界には政治態勢、宗教、文化の異なる様々な国や地域、民族があります。人間同士の信頼の関係を大切に築きながら、どうか世界の人々とのつながりを求めて行ってほしいと思います。がんばってください。応援しています。